

# 智儼の教判説について

## 中 條 道 昭

はじめに

中国華嚴学の大成は賢首大師法蔵（六四三～七二二）によつてなされた。『華嚴五教章』に教理的綱要は論ぜられ、なかでも「五教十宗」の教判は光統律師慧光（四六八～五三七）・浄影慧遠（五二三～五九二）等の地論学、天台智顛（五三八～五九七）の天台学、嘉祥吉蔵（五四九～六二三）の三論学、更には新来の玄奘（六〇〇～六六四）の唯識学の諸説を先行する学積として踏まえながら、彼の所依とする本経『華嚴経』を無尽円教にすえた仏教統合の理論である。「所詮差別」において「所依心識」以下「仏身開合」まで、所詮の法義の差別が能詮の教の差別としてあらわれる構造は、その一一が五教をもって統攝せられる。

このような法蔵によって明確ならしめられた五教という概念の創出は、その師とされる至相大師智儼（六〇二～六六八）

にかかるものである。法蔵の著わした『華嚴経伝記』によるなら、智儼はその習学期において、『撰大乘論』をはじめとして『四分律』・『迦延毘曇』・成実・十地』等の論、『地持・涅槃』等の経の講説を聴いたとされ、これら所謂旧来の仏教学に通じてそしてその後、至相寺智正（五五九～六三九）の講筵において『華嚴経』の講義を受けたとある。智儼の著作のうち、彼が二十七歳の時に著わしたとされる『搜玄記』、晩年に近い『五十要問答』・孔目章』に教判の論述がみられるが、その五教に関する論に及ぶのは、もっとも最後に所述をみた『孔目章』である。

法蔵の五教判は智儼をうけることによって確立し、詳論を極めるが、智儼には法蔵のなした五教論の展開が、もとよりその視野にないことは明らかである。法蔵の所説を離れた智儼の教判論の素描がなされなければならない所以と考える。

五教判をみない先立つ著作における所論を整理して、『孔目

『華嚴經』を円教とし一乘別教と位置ずける中で、五教の判釈はどのような意味をもって依用されるのかを検討したい。

そしてこの五教判は法蔵にとって彼の用いた教判のもっとも中核をなすが、弟子の静法寺慧苑（六七三～七三四頃）においてさえ承用せぬところとなつて、五教は天台智顛の化法の四教に頓教を介在させたといひ、清涼澄観（七三八～八三九）は五教を排することはしないが、慧苑の説を批判しながらも天台の四教との関係は認める。また後世の華嚴宗といわれる人の間でも、四教と五教相互の配釈について諸論はありながらも、関係そのものの否定はないのである。<sup>(1)</sup>

慧苑・澄観をして如上の把握をせしめた五教判は、二者が法蔵の『五教章』を通しての所論である。小論では一人智儼に留めて考察したい。<sup>(2)</sup>

搜玄記にみられる教判

—漸頓円—

智儼の依用する教判として、一番早くあらわれるのは、『搜玄記』の『華嚴經』を釈す指針とする漸頓円の三種判である。この判別を出すのはどのような理由によるものか。

一化始終、教門有三。一曰漸教、二曰頓教、三曰円教。（T 35・

13c）

と釈尊一代教化の始終には教門の三門あることを述べる。教説に三部門をみるのであって実践門の判別ではなく、教説の判釈であり、教判といひうるものである。

漸教門には所詮の三として、修多羅・毘那耶・阿毘達摩の三蔵を掲げ、所為の二は、声聞・菩薩の二つを掲げる。

頓教門には、「示以三声聞道・説三辟支仏・説三菩薩道・説三無量仏法」という階梯を示すが、実践的な面での根機に説かれる教法とみることができ、「以此文一証、知有三乗及頓教三乘差別。」と述べて一乗と頓教・三乗の別をいっている。即ち頓教の撰とは、次の問答の中に表われているように、教による根機の悟りについていうものである。

問、頓悟与三乗何別。

答、此亦不定、或不別。或約智与教別。又一浅一深也。…（T 35・14b）

そして円教門は、説於解脱究竟法門と述べ、仏事を満足する円満の教でその対象は上達分階仏境者とする。

この三種の判別のうち『華嚴經』を「頓及円二教撰」とする。そして『華嚴經』を円教とするのは慧光に始まるといわれる。またここにみられる漸頓円の三種判も、智儼は慧光の『華嚴經疏』によつたというのが古来指摘せられるところである。慧光の漸頓円三種判を検討するに、『華嚴經伝記』の慧光の伝に、

有<sup>二</sup>疏四卷、立<sup>二</sup>頓漸円三教、以判<sup>二</sup>群典、以<sup>二</sup>華嚴<sup>一</sup>為<sup>二</sup>円教、自<sup>レ</sup>其始也、若<sup>二</sup>涅槃維摩十地地持<sup>一</sup>並疎<sup>二</sup>其奥旨。(T 51・159 b)と法蔵は述べ、それを凝然は、

至相尊者搜玄記一云、一化始終教門有<sup>レ</sup>三、一曰漸教云云、第二頓教云云、第三円教云云、此経即頓及円二教撰、搜玄所説、專掘<sup>二</sup>光統<sup>一</sup>、宗旨義節事是所帰、至相既獲<sup>二</sup>光統疏意<sup>一</sup>、文言分明。(T 72・366 c)

と、智儼が慧光の疏によってこの三種判を用いたのは明らかとしてゐる。

『起信論本疏聴集記』には、習学期に智儼が『華嚴経』の講説を受けたとされる智正の『華嚴経疏』巻一の断簡を載せてゐる。『円宗文類』第三所<sup>レ</sup>之とある。『華嚴経』の撰教分齊を述べる一節で、『搜玄記』に教門の三を分ける論述はこれに極めて近く、漸頓の義に対する経論の引用も含めて智儼は全くこれに依拠したとみてよいであろう。漸頓円の三種判と、『華嚴経』を頓円二教の撰とするのも同じである。<sup>(3)</sup>

ここに慧光を祖とする地論学の学系の流れをみることできるであろう。しかし法蔵は『五教章・探玄記』に漸頓円三種判の創唱者としての慧光を掲げるのみであり、智正がそれを承用したことには触れてなく、『華嚴経伝記』にも疏十巻のみをあげ、智正を立伝してないのである。慧光が『華嚴経』を円教の撰とするのを記すが、『搜玄記』にては頓円二

教であり、智正の所説の方をとっていることは注意せられるべきであろう。<sup>(4)</sup>

慧光が漸頓円の三種判を創唱したのは、『華嚴経』を円教として位置づける為であろうが、漸頓と合せ用いたのはそれに先行する漸頓二教によって『華嚴経』の判教がなされていることに対する自身の教学上の要請とみることが出来る。智顛は『法華玄義』巻十に南三北七にまとめて南北朝の時代に、中国仏教の中で生まれ行われた学説を掲げるが、所謂南地に於いて行われた羅什門下の道場寺慧観を始めとする頓漸不定の三種教相では、

華嚴為<sup>レ</sup>化<sup>二</sup>菩薩<sup>一</sup>、如<sup>二</sup>日照<sup>一</sup>高山、名為<sup>二</sup>頓教。(T 33・801 a)と、『華嚴経』に対して頓教に充てる説を紹介する。この中では、慧光が因縁・仮名・誑相・常宗の四宗判を用いたことしか述べてはいない。また同じく吉蔵も慧観の頓漸二教説を『三論玄義』に掲げる。慈恩大師基は『法苑義林章・成唯識論料簡』に菩提流支が『楞伽経』による頓漸二教を唱えたことを述べているが、『華嚴経』との関係はない。慧遠は『大乘義章』に齊朝武丘山の隠士である劉虬の頓漸説を伝えてこれを批判している。法蔵は『五教章』には誕師、『探玄記』には真諦と、並びにこれに従ったとして慧遠を挙げる。法蔵に於けるこの人物の変換が何故に行われたものか、その所以

は明らかにしえない。

南北朝から隋代にかけての、頓漸二教の類型による教判説は以上の如くである。それを時代的に最も先行すると思われる道場寺慧観（一四三三）に関して検討してみたい。彼の活躍した中国仏教の時流には、羅什（三四四一四一三）の一音教説・曇無讖（三八五一四三三）の半満二教説の創唱のあったことが後代の仏者によって述べられる。しかし、この二説は經典に顯われるその教相を判別して仏陀の根本真意を求めようとする、經典の地位の判定を下すというような段階的分判とはいえない。即ち、道安による格義仏教の克服には、個々の經典がどのような相互の連関をもって統一的体系をなし、仏陀の法が表詮せられているのかということが、重要な課題として意識されながらも、未だそれに序列的階梯を見いださうとする姿勢は薄く、所謂、後に經典の教相判釈によって教理を体系づけようとするに至る前段階の時期にあたるであろう。慧観は慧皎が『高僧伝』訳経編に、羅什の訳業に助力して大いなる功績のあった八名を挙げる中の一人である。<sup>(5)</sup>そして義解篇に録される慧観伝には、

訪<sup>ニ</sup>覈異同<sup>ニ</sup>詳<sup>ニ</sup>弁新旧。風神秀雅思入<sup>ニ</sup>玄微。時人称<sup>レ</sup>之曰、通<sup>レ</sup>情則生融上首。精<sup>レ</sup>難則觀肇第一。（T 50・368 b）

とあり、道生・道融に対して義解に精通することに於いては僧肇と並び称されている。またその著作については、

廻著<sup>ニ</sup>法華宗要<sup>ニ</sup>序以簡<sup>レ</sup>什。……

著<sup>ニ</sup>弁宗論、論頓悟漸悟義、及十喻序、贊諸經序等。（T 50・368 b）と、頓悟漸悟を論じた著述のあることが知られ、『出三藏記集』巻第十二法論目錄の慧蔵集に『漸悟論』を編録している。

古蔵の述べる慧観の頓漸説は、頓教は「華嚴之流、但為<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ニ</sup>具<sup>ニ</sup>足顯理<sup>ニ</sup>」、また漸教は「始從<sup>ニ</sup>鹿苑<sup>ニ</sup>終竟<sup>ニ</sup>鵝林<sup>ニ</sup>、自<sup>レ</sup>淺至<sup>レ</sup>深、謂<sup>ニ</sup>之漸教<sup>ニ</sup>」<sup>(6)</sup>とあり、積迦一代の教説である經典を一貫した時間的列序によってとらえようとするものである。一方、頓悟という思想は慧観と同門の道生（一四三四）によって代表される。彼は什門四哲の一人で『出三藏記集』の

『道生法師伝』をみれば、

隆安中移入廬山精舍、幽棲七年以求其志、常以為<sup>ニ</sup>入道之要<sup>ニ</sup>慧解為<sup>レ</sup>本、故鑽<sup>ニ</sup>仰群經<sup>ニ</sup>斛<sup>ニ</sup>酌雜論、万理隨<sup>レ</sup>法不<sup>レ</sup>憚<sup>ニ</sup>嶮遠<sup>ニ</sup>、遂与<sup>ニ</sup>始興慧叡東安慧嚴道場慧観、同往<sup>ニ</sup>長安<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>羅什<sup>ニ</sup>受學、関中僧衆咸稱<sup>ニ</sup>其秀悟<sup>ニ</sup>。（T 55・110 c）

とあり、慧叡・慧観・慧嚴らと共に長安にて羅什に従って受學し、積年経論を研覆して多くの僧から秀悟と称えられた程である。そして、

夫象以<sup>レ</sup>尽<sup>レ</sup>意、得<sup>レ</sup>意則象忘、言以<sup>レ</sup>寄<sup>レ</sup>理、入<sup>レ</sup>理則言息、自<sup>ニ</sup>經典東流<sup>ニ</sup>詠人重阻、多守<sup>ニ</sup>滯文<sup>ニ</sup>鮮見<sup>ニ</sup>円義<sup>ニ</sup>、若忘<sup>レ</sup>筌取<sup>レ</sup>魚則可<sup>レ</sup>与<sup>ニ</sup>言道<sup>ニ</sup>矣。於是校<sup>ニ</sup>練空有<sup>ニ</sup>研<sup>ニ</sup>思因果<sup>ニ</sup>、乃立<sup>ニ</sup>善不受報及頓悟義<sup>ニ</sup>。（T 55・111 a）

と、頓悟を主張した。更には、

又六卷泥洹先至三京都、生剖三析仏性二洞三入幽微、乃説三阿闍提人皆  
得成仏、于時大涅槃經未三至此土、孤明先發獨見近衆、於是旧学僧  
党以為三背經邪説、譏忿滋甚、遂顯於大衆擯而遺之。(T 55・III a)

と、闡提成仏説を述べて、当時の仏教学者に擯斥せられて呉  
の虎丘山に入った。

その弟子道猷<sup>(7)</sup>もこれを受け、宋の簡文帝が、慧観に「頓悟  
之義、誰復習之。」と問うたに對して、慧観は「生公弟子道  
猷」と答えて宮内に招せられた。

即延入三宮内、大集三義僧、令猷申三述頓悟、時競弁之徒閔責互起、  
猷既積三思參三玄、又宗源有本、乘三機挫三銳往必摧三鋒。(T 50・

374 c)

とその伝に記されるが、簡文帝は、

生公孤情絶照、猷公直轡独上。

と称えたとある。

道生の唱えた頓悟とはどのような悟をいうのであろうか、  
僧肇の編した『注維摩詰經』卷七に道生の見解として大乘の  
悟りについて載せている。

夫大乘之悟本不<sub>下</sub>近捨<sub>三</sub>生死<sub>一</sub>遠更求<sub>之</sub>也、斯為<sub>下</sub>在<sub>三</sub>生死事中<sub>一</sub>即用<sub>三</sub>  
其<sub>二</sub>実<sub>一</sub>為<sub>三</sub>悟矣。苟在<sub>三</sub>其事<sub>一</sub>而變<sub>三</sub>其<sub>二</sub>実<sub>一</sub>為<sub>三</sub>悟始<sub>一</sub>者、豈非<sub>三</sub>仏之萌  
芽起<sub>三</sub>於生死事<sub>一</sub>哉。其悟即長其事必巧、不<sub>三</sub>亦是種之義<sub>一</sub>乎。所以  
始<sub>三</sub>於有身<sub>一</sub>終至<sub>三</sub>一切煩惱<sub>一</sub>者、以明<sub>三</sub>理轉扶疎<sub>一</sub>至<sub>三</sub>結<sub>一</sub>大悟<sub>一</sub>実<sub>一</sub>也。

(T 38・392 a)

と、生死に沈淪する人間のあり方の中に仏種を見る。そして

智儼の教判説について(中條)

生死を離れて悟りを求めようとする者については、

以下本欲<sub>三</sub>捨<sub>三</sub>生死<sub>一</sub>求<sub>三</sub>悟<sub>一</sub>、悟則在<sub>三</sub>生死外<sub>一</sub>矣。無復不<sub>レ</sub>捨即悟之  
義、故不<sub>レ</sub>能<sub>三</sub>復發<sub>三</sub>菩提心<sub>一</sub>也。(T 38・392 b)

と、本来生死の現実にある悟りを生死の外に求めても、生死  
を捨てることができない為に即悟の義はなく、菩提心を発す  
るといふこともあり得ないと述べる。

慧観と道生との頓漸に関する両者の主張は、先の『出三蔵  
記集』第十二の「法論目錄」等九帙慧蔵集に

漸悟論釈慧観 沙門竺道生執頓悟

謝康樂靈運弁宗述頓悟

沙門釈慧観執漸悟 明漸論<sub>釈曇無成</sub> (T 55・84 b)

と述べられ、先の簡文帝の質により慧観が道生の弟子道猷の  
名を挙げた記事からも、双方互いに漸と頓の對立する立場に  
あつたことを意識していたのである。

この劉宋の時代には謝靈運の『弁宗論』に

華人易<sub>三</sub>於見<sub>一</sub>理、難<sub>三</sub>於受<sub>一</sub>教。故閉其累学而開其一極。夷人易<sub>三</sub>  
於受<sub>一</sub>教、難<sub>三</sub>於見<sub>一</sub>理。故閉其頓了而開其漸悟。(T 52・225 a)

と儒仏の教説を見理・受教ということによって頓漸の概念を  
附して比較している。それが仏教の教説そのものに頓漸の義  
を見出したのが、道生また慧観といえるであろう。

上述の慧光が始まるといわれる漸頓円の三種判が、この二  
者の頓漸説を直接に繼承するものとはいえないが、様々な経

典に展開せらるる仏陀の教説を体系ずけて捉えようとした慧光にとつて、一方に円教を独立させて頓漸二教との鼎立をみるに至るには、無視し得ぬ先行する学説であつたと思われる。

— 一・三・小 —

次に『搜玄記』にみられる教判に一乘三乘小乗の分判がある。これは智儼自ら、

依<sub>三</sub>真諦撰論、一者一乘、二者三乘、三者小乘也(T 35・14 b)

と述べているが、澄観は『撰論』の他に「部異執疏第二卷中」と指摘している。この一三小の分判は『五十要問答』によつて詳説される。『搜玄記』巻第一下「光明覺品」第五の末尾に「為<sub>レ</sub>表<sub>下</sub>法有<sub>三</sub>淺深<sub>二</sub>行有<sub>中</sub>増徴<sub>上</sub>故。」として法の分齊によつて諸位の行に二十二門を開いているが、「光明覺品」を積する来意に「何故来者、將欲<sub>レ</sub>説故、集<sub>三</sub>有縁衆<sub>一</sub>、并顯<sub>三</sub>法分齊<sub>一</sub>。宗趣に「宗為<sub>下</sub>集<sub>三</sub>同法衆<sub>一</sub>亦顯<sub>中</sub>法増徴<sub>上</sub>。」と述べるのを受けている。次に引くと、

今略開<sub>三</sub>諸位<sub>一</sub>為<sub>三</sub>二十二門<sub>一</sub>。六道因果即為<sub>三</sub>六門<sub>一</sub>。声聞辟支二人因果、通説復為<sub>三</sub>二門<sub>一</sub>。声聞辟支所依之仏、為<sub>三</sub>彼二機<sub>一</sub>説<sub>三</sub>四諦教<sub>一</sub>及十二因縁教、即分<sub>三</sub>仏通<sub>二</sub>因及果<sub>一</sub>復為<sub>三</sub>二門<sub>一</sub>。声聞縁覺廻心入大乘、於<sub>三</sub>初教<sub>一</sub>、通<sub>三</sub>因及果<sub>一</sub>復為<sub>三</sub>二門<sub>一</sub>。直進初心菩薩通<sub>三</sub>因及果<sub>一</sub>復為<sub>三</sub>二門<sub>一</sub>。直進熟教及廻心熟教通<sub>三</sub>因及果<sub>一</sub>復為<sub>三</sub>二門<sub>一</sub>。頓教因果復為<sub>三</sub>二門<sub>一</sub>。從<sub>三</sub>愚法声聞<sub>一</sub>総撰<sub>三</sub>諸位乾慧地已上菩薩及仏<sub>一</sub>復為<sub>三</sub>二門<sub>一</sub>。普賢位中從<sub>レ</sub>信已上乃至<sub>三</sub>十地<sub>一</sub>、皆通<sub>三</sub>因果菩薩及仏<sub>一</sub>復為<sub>三</sub>五門<sub>一</sub>。此依<sub>三</sub>普賢阿含<sub>一</sub>説。(T 35・27 b c)

とあり、小乗の人と仏・三乗の廻心直進・頓教・普賢位と諸位を分けている。ここに小三一の中に頓教を位置させるのをみることができ、漸頓円三種判において『華嚴経』を頓円二教の所撰とする説を承けているものと思われる。『五十要問答』上巻「二十二立一乘位義」もこれを受けている。しかし頓教の位置はみられず「為<sub>下</sub>直進菩薩從<sub>三</sub>初十信<sub>一</sub>修滿<sub>三</sub>十地<sub>一</sub>後得<sub>中</sub>作<sub>上</sub>仏<sub>一</sub>成<sub>三</sub>初一念正覺<sub>一</sub>復為<sub>三</sub>一門<sub>一</sub>。」とあるのがそれに当たるのではなからうか。「広説如<sub>三</sub>疏本<sub>一</sub>」と云つて『搜玄記』にゆづつており、小三一分判による立位差別を述べている。

以上『搜玄記』にみられる教判について検討を加えたが、漸頓円三種判は近くは智正をうけ、慧光の『華嚴経疏』によつて殊軫を開かしめられたのであつた。そして頓漸という語義の縁由を道生・慧観に求め、中国仏教に於いて外来の仏教と自国に個有の儒教と比する格義的要求の下に依用された概念が、仏教の統一的体系を捉える場合に於いて用いられそれは慧観の頓漸二教説をみるように充当せられた。故に漸頓円の三種判は、小三一の分判が真締に由来するのとは異なり、中国の仏教者に於いて創唱せられたという点に注目されなければならぬ。即ち、智儼は『搜玄記』の冒頭に、中国仏教の展開として生じた漸頓円の判別を掲げることにより、印度仏教以来の小三一の判別に優位を置いているものとみることができ、また二説の融合的論述を為しているのを先に挙げた

が、この二つ点から『搜玄記』における智儼の教判に対する姿勢が、漸頓円の綱格の下に小三一を位置づけるといふ傾向を窺うことができよう。

### 五十要問答にみられる教判

前項で述べた如く、『五十要問答』に於いては一乗三乘小乗による分判のみであり、頓教に及ぶ教判説はみられないが、三乘小乗に対する階位の規定が極めて詳しく論ぜられる。即ちその冒頭に「今建<sup>三</sup>五十要問答<sup>二</sup>以顯<sup>三</sup>一乘文義<sup>一</sup>」<sup>(10)</sup>とあるように、三乘小乗の分齊を定めて一乗の文義を顕揚しようとするのである。一乗の文義とは『搜玄記』において注釈された『華嚴經』所説の教義であることはいうまでもない。上卷第二十六「諸經部類差別義」に經典の判別を行つてゐるのを見る。即ち

如<sup>三</sup>四阿含經<sup>一</sup>局小乘教。

正法念經<sup>三</sup>正解行別邪解行通<sup>二</sup>三乘教。

涅槃經等及大品經<sup>三</sup>三乘終教。為<sup>二</sup>根熟聲聞<sup>一</sup>説故。

金剛般若<sup>三</sup>三乘始教、初会愚法声聞故義意在文。

維摩思益仁王勝天王迦葉<sup>三</sup>佛藏等為<sup>二</sup>直進菩薩<sup>一</sup>説。仍直進有<sup>二</sup>二種<sup>一</sup>。

一大乘中直進、二小乘中直進菩薩。

此二<sup>三</sup>直進教亦有<sup>二</sup>同異、準撰可<sup>レ</sup>知。

華嚴一部は一乘不共教。

余經是共教、一乘三乘小乘共依故。又華嚴是主、余經是眷屬、以<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>準<sup>レ</sup>之諸部教相義亦可<sup>レ</sup>解。

如<sup>三</sup>法華經<sup>一</sup>宗義是一乘經也。三乘在<sup>三</sup>三界内<sup>一</sup>成<sup>二</sup>其行<sup>一</sup>故。一乘三界外与<sup>三</sup>三界<sup>一</sup>為<sup>二</sup>見聞<sup>一</sup>。(T 45・523 a ~ b)

とあるように、三乘教に始終を分け、始教の中には愚法声聞、直進菩薩を分ける。又、『華嚴經』を不共教として余經は共教という分齊をみるが、「一乘分齊義」に一乘教の二種を挙げ、

円教一乘所<sup>レ</sup>明諸義、文文句句皆具<sup>二</sup>一切<sup>一</sup>、此是不共教、広如<sup>三</sup>華嚴經説<sup>一</sup>。二共教者即小乘三乘教、名字雖<sup>レ</sup>同意皆別異、如<sup>三</sup>諸大乘教中広説<sup>一</sup>。(T 45・522 b)

とあるが、一乗の共不共という二教は、『孔目章』に至り、正乘方便乘(一乘三乘義章)<sup>(11)</sup>また別教同教(融会一乘章・真如章)<sup>(12)</sup>と表現せられる。

以上、『五十要問答』に顯られる教判は、一三小の三乘による分判を出ておらず、『搜玄記』にみられたような、漸頓円の頓教をその中に位置づけることはしていない。これは上卷第三「衆生作仏義」に

若依<sup>三</sup>三乘始教<sup>一</sup>則半成仏半不成仏。若直進及回心二人修行滿<sup>三</sup>十千劫、住<sup>三</sup>堪任地<sup>一</sup>者並皆成仏。若未<sup>レ</sup>至<sup>三</sup>此位<sup>一</sup>則与<sup>三</sup>闍底迦位<sup>一</sup>同。如<sup>レ</sup>此人等並皆不<sup>二</sup>成仏<sup>一</sup>。此<sup>レ</sup>擲<sup>レ</sup>位語。若依<sup>三</sup>此判<sup>一</sup>四句分別。準亦可<sup>レ</sup>知。此如<sup>三</sup>瑜伽菩薩地説<sup>一</sup>。若依<sup>三</sup>三乘終教<sup>一</sup>則一切有情衆生皆悉成仏。由<sup>三</sup>他聖智<sup>一</sup>顯<sup>二</sup>本有仏性及行性<sup>一</sup>、故除<sup>三</sup>其草木等<sup>一</sup>。如<sup>三</sup>涅槃

槃經説。(T 45・519c)

と述べるように、三乗の修道の差別をといて始教の分齊を定めることによって、一乗の義を顕揚しようとする面に意が払われたものとみることが出来る。それはこの「衆生作仏義」に於いて一乗義について、

依<sub>三</sub>一乗義一切衆生通<sub>二</sub>依及正<sub>二</sub>並皆成仏。如<sub>三</sub>華嚴經説。(T 45・519c)

といふ前段では及ばなかった依正二報を通ずる成仏が一乗義に当たるとする。そして「即是一乗共教非<sub>二</sub>別教<sub>一</sub>也。」と結ぶ。即ち、小乗三乗に対比する意味に於いての一乗の教説を表詮しようとしているのである。『搜玄記』に掲げる漸頓円三種判を離れて、小三一の分判によってつらぬく『五十要問答』は、『孔目章』に至る前段階というのみではなく、玄奘の齎した新来の唯識仏教、智儼が三乗始教と位置づける、五姓隔別を主張する印度仏教に対する姿勢とみることが出来る<sup>(13)</sup>のではなからうか。

### 孔目章にみられる教判

上述の『搜玄記・五十要問答』に対し『孔目章』は、漸頓円・小三一の二種の分判を単独に用いることは少なく、両判の融合とみられる型の小初終頓円の五教によって教判の網格を表わすことが多い。法蔵に依って確立された五教からみる

ならば、決して要語の使い方は一定している訳ではない。その視点よりするなら明らかに五教に配釈できるのである。しかし智儼にあって五教という用語例は極めて少ない。

『孔目章』に現われる教判を挙げてみると次のようである。小乗三乗一乗とその派生とみられる、三乗小乗・三乗一乗・大乘小乗・大乘中乘小乗・小乘大乘円教・小乘三乗円教等がある。この分判に於いては小乗の二乗（声聞・縁覚）の愚法と回心とをどのように位置づけるかが問題であり、愚法小乗という場合には声聞、そして二乗の廻心という場合には縁覚としている。「道品章」に「小乘道品、廻心亦同。」として、

廻心道品、為<sub>二</sub>引<sub>一</sub>愚法小乘<sub>二</sub>故、名同<sub>二</sub>小乘。(T 45・554c)

と述べ、さらに「直進与廻心、俱異<sub>二</sub>於声聞<sub>一</sub>。」といって廻心を直進とともに声聞とは異なる階位に置いてみているのである。

三乗とは、まず大乘を三乗の中に位置づけるのを見ること<sup>(14)</sup>ができる。「明智章」では、三乗については二有りとし、初教・熟教に分け、「初教廻心智」という云い方をする。そしてこの二の所説は「是大乗智」と、大乘を三乗の中に位置させる。

「減尽定章」には「通<sub>二</sub>大乘初教及小乘<sub>一</sub>。何以故、為<sub>二</sub>二人俱有<sub>一</sub>廻心<sub>二</sub>入<sub>一</sub>熟教<sub>上</sub>故。」と述べまた「若約<sub>二</sub>初教直進等<sub>一</sub>廻心。」という表現もする<sup>(15)</sup>。即ち、大乘に初教と終教とをわけ、初教にはさらに直進と廻心とに分けて終教に入る為の階梯を設け



ている。これによると、初教と終教は共に大乘の中に位置されるが、広い意味に於いては単に三乗を初教終教と分ける場合もある。大乘の初教に直進と廻心とを開くのは斯る意味により、三乗教の中の初教であり、小乗の廻心までをも含容すると解せられる。三乗の中から大乘教のみを云う場合には、大乘の初教終教はそれぞれ、初教は空教、終教は真如・如来藏教に充当せられる。

総じて小乗三乗一乗の分判は『五十要問答』と同じく、一乗別出の為に小乗三乗の分齊を規定しているとみることが出来る。この判別からは、「小始終円」の四教が導き出される。先に『搜玄記』に小三一の中へ頓教の位置するのをみたが『孔目章』にそれを求めて、頓教に及ぶ論述を検討したい。

「入仏境界章」に次のように述べる。

若三乘人所知境界、得空無相解、是仏境界。若随相解、是凡夫法。於中雖有漸教頓教、不同遲疾有異、莫不皆為成機滅病應理。(T 45・547c)

即ち、仏境界の小乗三乗一乗の各別を述べ、三乘人所知の境界は「空無相解」とし、「相解」は凡夫小乗とみる。三乗人の所知は「雖有漸教頓教不同」と漸頓二教が挙げられそれに遅疾の差をみている。そして小三一の分判による一乗の境界を掲げるが、その三乗には初終を分けこの二教と一乗との間に頓教を置くが、頓教を三乗の撰とするか三乗は初終のみと

智儼の教判説について(中條)

するかは明らかでない。

「凡聖行法分齊不同義」では

仏為引苦、仍許令行、準此人天善根戒施修等、教令行施、雖非究竟、為離畜生餓鬼、許行不疑、若修菩薩道、為廻声聞、人天、故仏許行、声聞緣覺即是其事、若修菩薩道、為廻声聞、初教許行、為引初教、終教許行、為引漸教、頓教許行、為引頓教、円教許行、故信位満心賢首歎德、広弁行施。(T 45・548b)

と、畜生餓鬼より人天・声聞緣覺・初教・終教・漸教・頓教・円教と次第する階位を述べる。この所述では初終二教と漸教との関係が、漸教が終教のみか、初終合して漸教なのか明白ではない。頓教は前章と同じく終円の間に配される。上掲の二章により云えることは、頓教とは解を得るに速やかであり、その遅なる漸教に対応すること。そして終円二教の間に位置せられることである。それは頓なる教のあることであり、頓なる教に應ずる機根の想定も意味するであろう。

頓教と漸教との関係については「法数章」の末尾に

安立非安立門者、即三乘義。頓教漸教相望説也。漸由依教、是安立門。亦名依法住智説。頓教名為非安立門、又亦五教門中當自宗説、不藉名言根境、是非安立門。藉名言根境、是安立門。(T 45・556c)

と、安立非安立を立てることは三乗の義だとし、「頓漸相望説」としている。漸教は教、即ち方便施設によるので安立門

といい、これに対し頓教は非安立門であり「五教門中当自宗説」ともいう。自宗とは所謂小始終頓円の五教の中の頓教を指すか、或いは智儼の宗とする『華嚴経』所説の一乗円教を意味するかは明白といえない。安立非安立をたてるのは三乗の立場であるが、非安立を頓教とし、「不<sub>レ</sub>籍<sub>三</sub>名言<sub>一</sub>根境」ということを自宗説とするなら、これらの義を有する頓教は、単なる五教中の頓教をいうだけではないであろう。そして、また一方には漸教は安立門であり、言教の施設を藉りる三乗であることは明らかである。さらに「法住智説」が三乗の義にあたるとするのは「融会一乗章」に「三乗教義、依<sub>ニ</sub>仏後得法住智<sub>〇</sub>」と、述べるところである。

以上にみるところにより、頓漸二教は相望して立論せられることは明らかであるが、三乗を漸とすることにより頓教が相望されるのか、頓教の存することにより三乗を漸とするのかは明了ではない。三乗はそれ自らに次第の義を含んで漸なることは容認され得るが、それを漸教と言ひ換えられた時、直ちに頓教の併立することを意味するのであろうか。三乗はその階梯を踏むが故に明らかに漸ではあるが、一乗への階梯として頓を想定せずとも、直ちに仏果への悟入、即ち一乗円教を窮極とするに何らの矛盾も見い出せない。「法教章」の安立非安立の段に於ける頓教に対する所述は明確さを欠くが、同じ「法教章」のこれに先行する所述に、その経証で『維摩

経』を掲げて、

維摩経云、時維摩詰默然無言。文殊師利歎曰、是真入不二法門也。義当頓教。默絶<sub>三</sub>方法<sub>〇</sub>。陰入界等法染浄諸法、並皆同<sub>レ</sub>此。若無<sub>三</sub>維摩黙不二理<sub>一</sub>、即一切法不<sub>レ</sub>成。(T 45・556 b)

と言っている。これを上述の頓漸相望の安立門非安立門に於ける所説と合せば、所依の『華嚴経』の無尽円通の教門を三乗教より次第して説く場合に、維摩黙を義とする頓教をその間に介在させることにより、三乗を超越する意味に於いて一層の明確さを謀るのであるうか。只、『維摩経』の全体を頓教に充当するのではなく、各段の義をとって初教或いは終教に配当しているのである。

上に維摩黙を頓教に充当するのをみたが、「通観章」には但是一行三昧、抛<sub>三</sub>其所<sub>〇</sub>剋、亦得<sub>下</sub>与<sub>三</sub>頓教<sub>一</sub>義同。(T 45・550 a)と述べ、「頓教分齊義」には

義当<sub>レ</sub>在<sub>三</sub>頓教位中<sub>一</sub>、一実三昧説也。(T 45・537 a)

と、一行三昧・一実三昧が頓教の義に相当すると述べる。一実三昧については詳細は知れないが、一行三昧は『起信論』にみるところで、「即名<sub>ニ</sub>一行三昧<sub>〇</sub>」知真如是三昧根本。」と全ての三昧は真如を根本とするという、真如によって裏付けられている。<sup>(17)</sup>法蔵は『義記』<sup>(18)</sup>に『文殊般若経』を引いて注釈するが、『起信論』の本文に於いて「若人修行、漸々能生<sub>三</sub>無量三昧<sub>〇</sub>」とあるのは、真如三昧としての一行三昧が、

直ちに頓教に対応する義理を含むとは思われないが、「十地章」に、

約<sub>三</sub>頓教<sub>二</sub>明者、唯有<sub>二</sub>一門。所謂無相。何以故、由<sub>成</sub>三一行三昧<sub>一</sub>故。(T 45・561 a)

と述べている。これと『起信論』の所説を通してみるならば、法界一相、即ち衆生身と諸仏法身との無二平等なることが、無相という点に於いて頓教の義となるのではないかと思われる。

そして頓教を「一切不可説」と規定するのは「五怖畏章」に、

若約<sub>三</sub>頓教、一切不可説。(T 45・563 a)

「一乘三乘義章」に、

若約<sub>三</sub>頓教、即一切行位皆不可説、以<sub>三</sub>無相<sub>一</sub>故。(T 45・537 c)とある。

頓教に於いては一切は不可説であり、一行三昧或いは一実三昧の無二平等・無相を義とするのである。

上に頓教と漸教との関係に於いて、相望し、漸教は三乗教にあたること述べた。即ち、三乗教と頓教が直ちに相望することになる。頓教と漸教三乗教について「真如章」<sup>(19)</sup>に於いては、真如に一乘真如・三乘真如の二つを挙げ、一乘真如には同別、三乘真如には頓教門・漸教門を分けている。漸頓を共に三乗に撰している。漸教門は更に始教・終教・世間所知真

実の三門を掲げ、これをさらに始門終門に分けている。頓教には『維摩經』「不二品」と『大品般若經』に「諸法自性皆不説」と説かれるのを経証としている。これは頓教の義について述べたことと一致している。終教門の始門は「不二法門品」における三十一菩薩の不二法門、終門はその最後に位置する文殊菩薩の不二法門。始教門の始門は二空に及ばざる真如、終門は無為中最上の真如無為をあてる。第三門の世間所知真実は、始門が人天・声聞・縁覚の真实性の所撰に入ること。終門は自体堅固にして破壊すべからざる真如を言う。

この終教門に於いて始門に『維摩經』「不二法門品」における三十一菩薩の入不二法門、そして終門に三十一菩薩の後の文殊菩薩の不二法門をあてることにより、その最後の維摩の黙を義とする頓教に順次次第していくのをみることができ。さらに、漸頓共に三乗の所撰とするが、これは真如を一乘究極とする立場であり、三乗を一乘真如の同教門の撰とするこ  
とによって、三乘真如の中に頓教門が説かれているのである。即ち、一乘真如の同教門を以って一乘同教という、より一乘に近い立場の対比に於いて、頓教を三乗に寄せたとみるべきであろう。頓教は直ちに三乗の所撰とすることはできない。以上を考察した頓教は、所謂小始終頓円という五教の中に於いてはどのような意味をもって位置せられるであろうか。五教といわれる五つに分判する用例は『孔目章』に数多く見

出されるが、上述の如く、智儼自身において「五教」という用語を以って表現せられることは非常に少なく、「五乗」という名目によって表わされることがしばしばである。それを「頭教分齊義」にみるなら

依レ教有ニ五位差別不同。一依ニ小乗、有名之教詮ニ有名之義。此在ニ分別遍計位中。二有名之教詮ニ有名之義。有名之教詮ニ無名之義、此当ニ廻心初教位中義、当ニ即名義即空教ニ也。三有名之教目ニ有名之義、有名之教目ニ無名之義、無名之教目ニ無名之義、此当ニ熟教位中即性実成有之義、非ニ是所謂有也。四無名之教頭ニ無名之義、義当レ在ニ頓教位中、一実三昧説也。五有名之教説ニ有名之義、無名之教頭ニ無名之義、当レ在ニ円教位中見聞処説、有名之教頭ニ有名之義、有名之教頭ニ無名之義、無名之教頭ニ無名之義、此約ニ円教処ニ説、為ニ撰レ義無尽ニ故。（T 45・537 a ~ b）

と述べるが、「依教有五位差別不同」とあり、「依教」といわれる教とは以下に述べられる有名無名の教義の教であり、所詮の義理に対する、能註の言教をいう。故に各節に配当せられる小乗から円教処までの五つの階位を教とっているのではなく、即ち、「依教」の教は所謂の五教を指しているのではない。五つの階位を五教とするなら、「五位差別不同」は「五教義差別不同」といわれなければならないであろう。この段に於いて「五教」という名目は見い出せないのである。この「五位差別不同」は次の「一乗三乘義章」をみるように、正しくは五乗といわれるべき差別の表現である<sup>(20)</sup>。

五教を五乗として捉えた場合、教と乗との相違によって如何なることが明らかになるであろう。

智儼が五教をどのようにみているかは、「法数章」に「略有ニ五重、即是五乘人所軌教也。」<sup>(21)</sup>と、五乘人の軌則を教に置きかえて五教をみている。五乗は先述の「一乗三乘義章」の三説の中の第一説で、又同じくは「十地章」にもみられるが、「法数章」の所説によると「人天邪善根」に対する教えとして「梵世に及ぶ世間教」とし、義は「趣ニ向声聞ニ方便」とする小乗の下に位置づけ、次に愚法小乗の声聞縁覚の教えは「依ニ分別偏計性」による機根に対する第二となるのである。第三に大乘教としてその中に始終の漸教を挙げる。第四には頓教、第五に円教無尽をみることができる。故に所軌の教として五乘人に対応する教であり、五乘人という機根に視点を置いた立場では、小乗以下の機をも認めなくてはならない。また、始終二教を合せる大乘教を漸教と位置づけるのは、大乘に於いて廻心小乗より大乘趣入を認めるからであり、廻心向大の漸入から、大乘の中に始終の二門を分つならば、漸々の修行階梯を踏むという漸教の義が強まるのである。大乘終教から直ちに円教無尽の得果があつて趣入するのではなく、その間に頓教を位置づけることに依つて法の無尽と機を覆い尽す義理が一層明瞭になると思われる。何故なら頓教は一切不可説、一行三昧として全ての機を撰択することを認めない

からである。故に小三一の分判はその各教説の各々別なることを説明することにその重点を置く。それを直ちに教と置き換えただけでは完結をみず、五乗として五乘人の機根を基にすえながら、無尽円教を位置づけざるならば、ここに於いて頓教という一切不可説の立場に立つ教義のあり方が始めて要請せられるであろう。

玄奘の法相唯識を大乘始教に位置づけ、その五姓隔別説はもとより智儼のとりどころではないのである。このように五乗によって始めて導きだされる頓教を含む、所謂五教の体系即ち、小三一・漸頓円との融合はどのような構造を有するか次にみてみよう。

上件法門、撰<sub>二</sub>下諸教、頓属<sub>二</sub>其上<sub>一</sub>分<sub>二</sub>本教義。漸從<sub>二</sub>其末義、通<sub>二</sub>一乘三乘小乘、何以故、為<sub>二</sub>彼円教所目、及三乘終教寂照寂一相真如。并初教門染淨即空。愚法小乘苦諦之教。所詮実法、有為無為等宗並不<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>義各別<sub>一</sub>也。(T 45・538 b)

上掲の文が、章末の結びの一節として『孔目章』卷一の第三番目「一乘三乘義章」より以下五章に亘って同じく用いられている。これに智儼は一三小と漸頓円との相互の関係を述べるが、同時に五教といわれるものが包含せられているとみることができよう。

中で頓教は古来、「頓は其れ上分本教の義に属す」・「頓は其上に属し、分に本教の義也」・「本教の義を分つ」との三通

りの読解があるとされるが、智儼から云うなら、「本教の義を分つ」と訓するのが適切と思われる。何故なら、頓教は本来円教の所撰であるが、義に於いて一行三昧をして一切不可説・維摩の黙に充当するのであるから『華嚴経』とはその義は分たれる。漸教は円教の本教なるに對し、漸々に次第することにより「從<sub>二</sub>其末義<sub>一</sub>」と本末の末に從つて「通<sub>二</sub>一三小<sub>一</sub>」といわれるのであり、漸といふことは末の義によるが、本教・円教の所目であるが故に一三小に通ずる漸の義が生ずる。そして三乗の終教は寂照寂の一相の真如として、即ち、因果・仏菩薩に分けてみるので一相という。これについて凝然は「二別可<sub>レ</sub>見<sub>(23)</sub>」とも言っている。初教は「染淨即空」、一切法空とみる大乘空教。そして愚法小乘において能詮は苦諦の教、所詮の実法は有為無為等の宗にして「不<sub>レ</sub>同<sub>二</sub>義理各別<sub>一</sub>」と述べる。

上にみるように、漸は末の義に從うが故に一三小通じ、この一乗は、通ずる故に一乘同教であるが、該通とは機に應じて漸々に修行していく階梯を述べ、円教の所目とする。この漸々の趣向は頓教によって円教との結合がなされているとみることができよう。一方に一三小・漸頓円の教説があり、一方に機に應ずる五乗をみることによって小始終頓円の五教の綱格が定まるであろう。

おわりに

『搜玄記』に現われている漸頓円三種判は劉宋時代における中国人の仏教受容の研鑽から生まれた頓漸二教論に緒を発し慧光・智正への系統をみた訳であるが、同じく見出される小三一の分判は、三著を通じて仏教の断惑証理という最も根幹をなす学説の基底としてその位置を占める。『五十要問答』に於いて特に新しく印度から玄奘によって輸入せられた法相唯識に対する位置づけを、新訳語を依用しながらもその説はとらぬという卓越した手法によって大乘始教に定めたものも、<sup>(24)</sup>真諦より出るといわれる小三一判によってである。

『孔目章』においては、「始教即空終教即如」という三乗・漸教に対して一切不可説一行三昧を義とする頓教が明確に位置づけられるのである。即ち印度仏教において用いられた小三一判があくまで修業階位を定めるべく、そして導き出される。対して漸頓円の三種判はその個有の思想から仏説を受容した中国仏教者の生みだした中国仏教の思想である。

註

(1) 長水子璿は起信論疏筆削記卷二(T 44・307c)に「此五教与天台化法四教。但開合有異、而大況是同。彼則開前合後。此則開後合前。」と述べている。

(2) 智儼の教判については木村清孝博士「初期中国華嚴思想の

研究」四三〇以下―教判論上の『華嚴経』に於いて四項に亘って詳論せられており、更に加えるべきはないが、小論ではその教判説のうちとくに頓教説に注目してみたい。

(3) 梅辻昭音氏は「智儼の教判について」(印仏6・Ⅱ)に指摘する。断簡に於ける「教分齊」の声聞声聞・声聞縁覚・菩薩藏の分立、漸頓円に対する経文の引証等、搜玄記との思想的連関は非常に密接である。また智儼所述といわれる無性釈論疏第一も同じ収録され、「藏撰分齊」を述べる一節は搜玄記とその語句・論旨・文型はほぼ同じである。

(4) 記信論本疏聴集記卷第三本に「今此経者、二藏之中菩薩撰、漸頓教中淳、為ニ根熟直入ノ説故、是頓教法輪故。亦名ニ円教撰、故経云説ニ円満修多羅ニ也。」(日仏全 134)とあり智儼が華嚴経を頓円二教の撰とするに等しい。

(5) 高僧伝卷第三に「時有ニ生融影叡嚴恒肇、皆領ニ悟言前詞潤ニ珠玉、執筆承旨任ニ在伊人。」と掲げる。(T 50・345c)

(6) 三論玄義(T 45・5b)

(7) 出三藏記集卷第九の法慈法師撰述・勝鬘経序第十八に「竺道生義学弟子竺道収」(T 55・67b)と伝えられる。今はその伝の載る高僧伝に依る。

(8) 華嚴疏卷第二(T 35・513b)。円測は解深密経疏に「部執論記第二卷」(正統藏影印本 34・43右下)と表す。

(9) 五十要問答卷上(T 45・522b)

(10) 五十要問答卷上(T 45・519a)

(11) 孔目章卷第一(T 45・538a)

(12) 孔目章卷第四(T 45・585c)・586c)・卷第二(T 45・558c)

559 a)

(13) 坂本幸男博士「華嚴教学の研究」四〇三頁に五教判の成立について、「玄奘によって伝えられた唯識説に対して、全仏教学体系中における如何なる地位を与ふべきかという問題を解決せんとした結果であると思ふことができようと思ふ。」と述べられるが、五教判を見ない五十要問答に既に対応の姿勢が窺える。

(14) 孔目章卷第四 (T 45・582 b)

(15) 孔目章卷第四 (T 45・576 a)

(16) 孔目章卷第四 (T 45・586 b)

(17) 大乘起信論に「依三如是三昧一故、則知法界一相。謂一切諸仏法身与衆生身平等無二。即名一行三昧。当知真如三昧根本。若人修業、漸漸能生無量三昧。」(T 32・582 b)とある。

(18) 大乘起信論義記下末に「一行三昧者、如文殊般若經云(T 8・731 a) 何名一行三昧。仏言、法界一相繫縁法界。是名一行三昧。入一行三昧者、尽知恒沙諸仏法界無差別相。乃至廣説。以此真如三昧能生此等無量三昧。故名三昧根本。」(T 44・284 a)と注釈している。

(19) 真如章の科文を示すと下の如くである。

(20) 一乘三乘義章に説く三種の五乘説

- 1、人天・声聞縁覚・始終漸教・頓教・一乘
- 2、人・天・声聞・縁覚・大乘
- 3、天・梵・声聞・縁覚・如来 (T 45・537 c)

(21) 孔目章卷第二 (T 45・555 c)

(22) 高峯了州博士著「孔目章解説」卷一、十三頁

智儼の教判説について(中條)

(23) 孔目章発悟記卷五(日藏華嚴部上・350)

(24) 坂本前掲書四〇〇頁以下

真如章科文

